

人類館

知念正真

人類館

知念正真

登場人物

調教師ふうな男

陳列された男

陳列された女

舞台中央に、まるでお芝居のセットのような粗末な茅葺小屋がしつらえられており

1

陶器類、紅型、スルガー、ニクブク、クバ笠、ムンジュルー笠に至るまで、いわゆる「大和人」が、沖繩について、持っている知識のありったけを、辺り構わず、それも尤もらしく、飾り立ててあるという体である。

小屋の一方の柱には、稚拙な字で「リウキウ、チョーセンお断り」と書いた札さえブラ下がついている。

これらの民芸品に混じって、一組の男女が陳列されている。

——但し、これは、幕開きの情景描写としての、あくまでも便宜的な修辭法の一例にすぎない。実際には、それらは目まぐるしく変化する場のイメージを損なわない程度に、象徴的な物が望ましい。例えば、時として防空壕の中の司令室か何かに見えなくもない。

舞台全体がシルエットで浮かび上がり、のどかな幕開き。

風に乗って「御前風」が、厳かに聞こえて来るかも知れない。

一角にサーカスの調教師風な男が登場する。彼は良くしなう短い鞭をもっている。

調教師ふうな男（観客に）皆さん今晚は。本日は我が「人類館」へようこそおいでください

いました。

既に皆さん方、良く御承知の通り、人類普遍の原理にもとづき、全て人間は法の下に平等であります。何人たりとも、その基本的人権は尊重されなければなりません。いつ、いかなる時、いかなる意味においても、差別は決して許してはならないのであります。

（ちよつと考えて）つまり、……人類普遍の原理であります。

そもそも、差別はどのようにして、生まれるのか。何が原因でなされるのか？（鞭を示し）
これこれ、これであります。すなわち、ムチ蒙昧、ムチと偏見であります。（自分だけ笑
う）…ムチかしい？

しからば、ムチを一掃し、偏見を正し、差別を無くするにはどうすればよろしいか。

よくぞお尋ねくださいました。そこにこそ、我が「人類館」の果たすべき大いなる役割が
秘められているのであります。史上初の、そして空前の規模で開かれます我が「人類館」
は、世界中いたる所で差別に遭い、抑圧に苦しみ、迫害に泣く人種、民族を、色とりどりに
取り揃えてございます。黒人あり、ユダヤ人あり、朝鮮人あり、琉球人ありアイヌ、イ
ンディアン、エトセトラ…その数は枚挙に暇がありません。

彼らは何故なにゆえに差別されるのでありましようか！

皮膚の色が黒いのは彼らの責任でしょうか！貧乏で汚れ、言葉に訛があり、風俗習慣が違
うのは悪徳なのでしょうか！——差別の理由は全て、アイマイモコで、何よりも偏見に満
ちております。

どうぞ皆さん、彼等を良く見てやって下さい。彼等の一挙手一投足を、瞬きもせず

して下さい。穴のあく程、しみじみと見詰めてやって下さい。——そうすれば、賢明な皆さんのこと、多分、お気付きになる筈です。「彼等も私達と同じ人間なのに……」と。そこが大事なのです。「……彼等も私達と同じ人間なのに」そうです！その通りです！そうお気付きになった瞬間から、皆さんの心の中に、ほのぼのとした友愛の情が芽生え始め、やがて熱い連帯の絆で結ばれるのであります。

すなわち、鉄の団結であります。

——どうぞ、涙もろい方は、彼等の為に泣いてやって下さい。人類普遍の原理に基づき、さめざめと泣いてやって下さい。

笑い上戸の方は、彼等の為に笑ってやって下さい。彼等の不幸をカンラカンラと笑ってやって下さい。涙は、それが泣きの涙であれ、笑いの涙であれ、誠に尊いものであります。何故なら涙は、心理と生理の綾なす、人間的感情の、まことに美しい華麗なる結晶物なのですから。

最後に、待望久しいわが学術的人類展をご覧になるお客様にお願い致します。

カメラをお持ちのお客様、どうか、フラッシュをたかないでください。彼らはもろく傷つ

きやすい人種なのです。特に光に対しては敏感に反応します。フラッシュは絶対にたかないで下さい。

調教師ふうな男が鞭を一振りすると、舞台が明るくなる。

調教師 お待たせ致しました。こちらが琉球館でございます。

琉球の原始的住民は、アイヌ系のアマミキヨ種族でございます。

その昔、西南フィリピン諸島、台湾方面から北上して来た種族と、九州、奄美大島方面から南下してきた種族が、混合、調和することによって成立したものであります。

調教師ふうな男は、陳列されている男に近づき、鞭で顎をしゃくり上げる。男はふてくされているようにも見え、妙に従順に見えなくもない。

調教師 ご覧下さい。まず最初の特徴は、このように顔が四角で鼻が異常に大きく、横に広

がっているという事であります。俗に言う獅子っ鼻。これが非常に多い。

男は大勢の視線を支えきれず下を向いてしまう。すると突然、調教師ふうな男の鞭が鋭く唸り、男はあわてて姿勢をただす。

調教師 眼をご覧いただきたい。およそこの男のこの顔には不釣合いなくつきりと大きな腺病質な眼、まるで神経症病みのような、おどおどした眼、これも一つの特徴でございます。こいつのように顔が四角で、顎のエラが張っているのを琉球の言葉で……、(詰まると、男に眼で促す)

男 (ボソッと) ハブカクジャー……。

調教師 ハブカクジャーと申します。ハブというのは琉球に棲む毒蛇の事ですね。毒蛇の顎という意味でございます。

女の方に向き直る。

女はクバ団扇を使いながら、高麗煙管をくわえている。

調教師

さて、もう一つの特徴はこいつでございます。一見、私たちとそっくりで、どこも違いはないではないか、と思われるでしょう？無理ありません。素人眼にはそう見えません。ところが大きい。とっくりと観察して下さい。

まず、顔が全体に小さく狭くなっており、鼻がどちらかと言えば、高すぎます。そして何よりも、体全体が毛深いということがございます。驚くべきことに女でも毛深いのです。警察の手前、裸にしてお見せできないのがまことに残念ですが、今日は特別に、その一部をお目にかけましょう。

鞭が鳴る。女は機械的に片膝を立てる。調教師は鞭の先で裾をまくって見せる。

調教師

とくにご覧いただきたい。親の因果が子に報い、ハリガネの様な硬い脛毛。全身はりねずみのような毛。(勿論それ程でもない)ねえ、何の因果なの。あんなに何年もあんな

な苦い因果な目に合うなんて。のら如来、のら如来、三のら如来に、六のら如来……、粉米の生噛み、粉米の生噛み、こん粉米のこなま噛み（舌を噛んだらしい）サア、モウヨロシイレソー。余り見すぎますと今夜は悪夢にうなされますよ。

さて、世界に先がけて開かれました歴史的なわが「学術人類展」は、単に人類を展示するだけではありません。

衣食住はもとより風俗習慣に至るまで、いたれり尽くせりの資料を取揃えてございます。これは琉球の土民が、実際に住んでいる家でございます。地面に穴を掘って柱を立て、茅で屋根を葺き、笹竹で四方を囲んだだけの、まことに簡単な家でございます。

暖かい地方ですから、これで充分なのです。しかも驚いた事には、夜の夜中、留守中といえども、戸締りもしなければ鍵もかけない。……と言ったからといって早合点してはいけません。泥棒がない訳ではありませんよ。

それでは何故鍵をかけないか。驚くなかれ、何と盗まれる物が何もないからであります。次に、こいつらは何を食べて生きておるかといいますと、これが何と芋であります。

朝、昼、晩、芋ばかり喰っておる。芋を喰っておまけに裸足で歩いておる。すなわち、

イモとはだしであります。(観客に)「ご存知ですか? 「イモ・はだし論」。大きな声では言えませんが、主席公選の際、沖繩が基地を撤去して日本復帰すると、昔のようなイモとはだしの生活に戻るといった候補者がいたんですよ、いいえ、まじめな話。

学術上、まことに興味深いことではありますが、(鞭で女の体をつつき)この体は、芋で出来ているのであります。

その上、こいつらは渋茶が大の好物で、どこへ行ってもお茶ばかり飲んでおる。芋を喰ってはやたらにお茶をガブガブ飲む。だから琉球人には胃拡張が多い。

驚くことはまだあります。こいつらは蘇鉄も食べるのです。蘇鉄は有毒植物です。勿論危険です。年々歳々蘇鉄の毒にあたって死ぬ者の数は減らない。それでも蘇鉄を食べるので、世界広しと言えど、毒を食らう人種はそうザラにはおりません。

まこと、人類普遍の謎と申せましょう。

さて、ここはこのくらいに致しまして、次へ参りましょう。お隣はニグロ種族です。(脅すように)黒いのです。全身まっ黒! 皆さんはきつと肝を冷やされることでしょう。心臓の弱い方、血圧の高い方は、どうかご遠慮下さい。(去る)

陳列された男は立ち上がり、調教師ふうな男の去った辺りを用心深く伺う。それから、急に態度がガラリと変わり、横柄に振舞い始める。

男 (沖縄口まんちゃーで) くぬひやあ、何時かは叩つ殺してやる。必ず叩つ殺してやる!

女 (けたたましく笑う) ハハハハ……

男 何がおかしいかあひや!

女 さつきまではガタガターしていたくせして、今になってから空威張りして、家意地あがも、何にも出来るね。

男 誰がガタガターしていたかあひや! 狂い物言いして。ええ、あんなものチュバチだよ。

嘘だと思うだろう。いつでも誰とでも勝負してやるよ! 一回なんか、ええ。巡査小叩つ殺した事もあるんだよひやあ、酒飲んで。

女 それで金網入れられたんでしよう。

男 金網? 金網なんか何とも思っていないよ、僕は。何回入ったか、いちいち読み切れない程だよ。看守なんかがいるだろう? 刑務所には。職員なんかも、所長なんかも。ええ、皆な

友達だよ。シカシカするんだよ、僕には。看守なんかも。所長なんかも。

一遍なんか、ええ、軍のベース内に入ってよ、戦果上げに行つた訳さ。ええ。トラックの一杯、アメリカシート盗つて来た訳よ。トラック一杯にアメリカシート！

あの時も、MPにすぐ捕まって刑務所に入れられたけど、皆な、喜んでいたんだよ。良く来たなあつて。看守なんかでも、僕の顔知らないのがある訳さ、新顔で。威張っている訳よ、新人は皆な、威張りたがる訳よ「担当さん、ベンゾお願いします」と言っても知らない顔する訳。我慢できないからまた「担当さん、便所お願いします！」って、大きな声出さね、そしたら、え、わざわざ人の目の前でバンド外してよ（あからさまに、またに手をいれ）インキン搔いている訳よ、「便所おねがいます！」また言うさね。したら、え、「おまえ、懲役のくせにクソもたれるのか」って……。

ワジワジしてからに、便所行って意地糞マッテよ、その青蠅二才小、下腹蹴って叩つ転ばして「懲役も看守も同じ人間じゃないかあひゃあ。良く見てみれ。おまえの糞とどこが違うか、良く見てみれ！」ウシルクブーかつめてからに、便器の中に頭突っ込んでやったよ。――

刑期がまた延びたけどよ。傷害、叩つ加あされて。でもその看守小はおとなしくなっていたよ。いやがらせもしなくなつて。

刑務所では、僕は顔役小だよ、僕の家みたいなものだよ、刑務所は。

女 だったら、何で出て来るね、自分の家から？

男 だから、ワジワジしているんじゃないかひゃあ。

女 仕方あるね？騙される人が悪いんだよ。

男 騙される人が悪い？馬鹿小ひゃあ、騙される人が悪いってもあるか、騙す奴が悪いんだよ。何で人を騙すか？

女 (うるさそうに)はあ、もう良いさ。刑務所もここも、おんなじようなもんじやないね。馴れれば皆おんなじさ。

男 馴れればおんなじ？馬鹿小ひゃあ。常識で考えてもわからんね？笑われるよひゃ、ふりむにいして。

女は相手にせず、むんじゆるう笠を手に取りいじりまわす。やがてそれを被り、踊り

始める。

音曲「むんじゆるう」

男 刑務所は、ええ、人間的だよ、人間的。ここは何か、全く奴隷じゃないか。

じゅうしいめえ食べさせられると言うだろう？刑務所では。じゅうしいめえに少しずつ毒をいれてからに、殺すと言うだろう？全部嘘だよひゃあ。くさい飯を食わすと言うだろう？全然くさくないよひゃあ。食べるものも何もかも、刑務所の方が人間的だよ。ライスカレーなんかも出るんだよ。焼き飯なんかも。ここは何かひゃ、ええ、奴隷、どこも変わらん全く、ドレイ！

女 (コーコツと踊りに熱中している)

男 (いまいましそうに)あの青蠅二才小、必ず叩つ殺してやる。他人を騙して連れて来て、こんな所に押込めて、何とも思わんからね、恥もない。

(調教師の口調で)「食べ物に不自由はさせません。着る物も住む所も、何も心配は要りません。その上、学問も出来ます。好きなだけ勉強させます。難しい仕事ではありません。

ただ、黙って坐っているだけで金になるのです。」

女は踊りに没頭している。

男 食べ物に不自由はさせないと言ってからに、何を食わせるかと思ったら、毎日芋ばっかり。来る日も来る日も芋ばかり！

……おまえは本当にノータリンのアツパンガナーだな。こんな目に合わされても何も感じないのか？

女 ……。

男 おまえはここの方が良いと思ってるんだろう？ 沖縄では、ええ、モーキヤーしていたと言うんだろう？ どこね？

女 ……。

男 吉原ね？

女 ……。

男 十貫瀬？……栄町？ハーバービュー？

女 ……。

男 波の上？桜坂？センター？照屋……？

女 はあつきもう！良いじゃないね、どこだっても！あんたに関係ある訳？

男 関係ないけどさ。聞いたって良いじゃないか。怒るなひやあ、話しているだけじゃないか。物も言わさん訳？

女 物も言わさん？馬鹿るやさに。あんたはね、さつきからモノをヨミ過ぎているよ。男があんまりモノをヨミ過ぎるとね、みったフージがないよ、イキガぬフリユンタクと言ってね、恥カサインだよ。

男 ……。

女 人間、誰にだって話したくない事があるよ。誰にも聞かれない事があるよ。だから黙って、……あきらめて恥を忍んでいるんじゃないね。学問はなくても、それくらいの常識はあるよ。あんまり馬鹿にしなさんなひや……！

男は鼻白んで黙ってしまふ。

気まぜい間————

女 (やがて、取りなすように) ウチなんかも、六枚持っているよ。

男 ……?

女 アメリカシート。箆筒に入れておいてあるよ。

男 ……。

女 はじめは十枚あったけどさ。ヨシちゃんが無いと言いよったからさ。くれた訳よ、二枚。アケミにも二枚。全然使ってないものよ。さら新品。染みもついてないさら新品。メイド時分にアメリカカーたんめえから貰った訳さ。助平たんめえだったから、初めは断ったんだけどね。何もシート貰ったからと言って腹がクチクなる訳でもないし、ノーサンキューさね。禿ギチャビンたんめえの癖に、ええ、とつても助平! ……でも、良い人だったよ、奥さんウトウルーで。風呂場なんかでいたずらしようとする訳さ、ウチが、掃除している時に。「セイ・マー!」 ……奥さんに言うよつて言う訳さ、ウチが、英語で。そしたら、す

ぐ止めよったよ。

(懐かしそうに) アメリカに引き上げる時に、アメリカシートと犬二匹、シェパード犬くれてあつたさ。犬はもう死んでしまっているけどね。シートは使わないで、大事においてある訳。さら新品よ。十枚。

男 さっきは六枚と言ってからに、また、十枚って。

女 十枚さ。十枚って言ったさ。

男 誰かにくれたから、六枚って言いよったさ。

女 ううん。アケミたちにくれたのは、大和物さ、大和物のシート。大和物は薄くてビラビラーさね。だからくれた訳。アメリカ物は上等だから、取っておいてある訳。嘘だと思ふなら、いつかウチの家に来てみなさい、いつでも見せてあげるよ。

男 アメリカシートなんか、見ても何するか。

女 嘘だって言うからさ。

男 ユクサーひゃ、むるユクシ。本当はアメリカシートなんか、一つも無いんだろう？

女 有るよ！本当だってば！ヨシちゃんに聞いても分かるんだってば！

男 裁判にかけても絶対に勝つよ！騙すのが悪いんだからな。人間ひとを騙すのが一番悪いんだよ。

女 （再び小道具いじくりながら）小さい時、良く芝居見に行ったけどね。ウチなんかのお母さんが好きしている芝居シーがいた訳さ。男だけど、とっても綺麗かったさ。

男 ようし！必ず叩っ平かしてやる！証拠かつめてからに、裁判かけてやる。……正義は必ず勝つ！

女 お白粉ぬってから、女踊りする訳よ。女でもかなわない位上手だったよ。

男 秘密だよ。裁判にかけるまでは誰にも言うなよ。

女 言わないよ、誰に言うね。

男 女はウンターだからさ。

女 ウチは違うよ。ウチは言わないと言ったら、絶対、雷が落ちても言わないよ。

男 （安心して）よし！（構えて、連ねの口調で）

「志情の朽ちゆみ いつ迄も肝に思染みて、

与所に知らち呉るな」

女 (受けて) 「糸目から針目ふきるとも我身の

ぬゆで思里がみくし引ちゆが」

突如として「謝敷節」が湧き起り、二人は音曲に合わせて思い入れたっぷりに踊り始める。――――「奥山の牡丹」首里安仁屋勢頭部落の場。

ややあつて、調教師が現れる。鞭の一振りで音曲は中断され、男女はあわてて小屋に戻る。

調教師は、威圧的に歩きまわる。

調教師 何だ、これは！何の真似だ！何を騒いでいる？

男・女 ……。

調教師 おれがちよつと目をはなすとすぐこれだ！おまえたちはここをどこだと思ってる？女郎屋か？ここに遊びに来たのか？物見遊山にでも来たつもりなのか？

男・女 ……。

調教師　こんな調子だから、おまえたちは事大主義といわれるんだ！人格が卑しいと言われるんだ！卑屈と言われるんだ！（舌打ちして）……全く。情けない。

まあいい。今日のところは大目に見てやる。今回だけだぞ！今度こんな馬鹿さわぎをして
みろ。二人とも元の豚小屋に送り返してやるからな。（男に）おまえは豚バコ！（女に）
おまえは淫売宿にだ！わかったな！

女はしきりに、何とか言えと男に促すが、男は黙ってると、これを制する。

調教師は目ざとくそれを見付け、

調教師　……何だ？なにをこそこそしている？（癩癩を起こし）はっきりしろ！

鞭で威嚇する。

二人とも小さくなって縮こまる。

調教師 今言ったばかりだろうが！卑屈になるな！堂々とやれと。それなのにおまえたちは、おれに隠れてこそこそと……。

ははあん、そうか、そうなんだな。二人ともおれに隠れて何か企んでいるんだな。（意味ありげに）……いいだろう。それならそれで、おれにも覚悟がある。後で吠え面かくなよ。

女 （行きかけようとするのへ）あのう……、

調教師 何だ？

女 ……ウチは、何もたくらんでいませんです。

調教師 ほほう。そうか。……すると、こいつが一人で企んだという訳か。大した勇気だ、見上げた度胸だ。なかなか出来るもんじゃない。

男 ……。

調教師 で？何を、どうしようって言うんだ？

男 ……。

調教師 ……おい！！

女 （びっくりりして）約束が違うっていいよったです！

男はあわてたが、もう遅い。

調教師 約束？何の約束だ？

女 あんたに騙されたって。こんな所に押込められて、ドレイみただって。

調教師 ……奴隷？

女 食べ物も着る物も、不自由しない。学問もただで受けられると言ってからに、ひとを騙して恥もない。

調教師 ……それから！？

女 (調子に乗って) 証拠かつめてからに裁判に訴えてやる！正義は必ず勝つ！！

調教師 ……それだけか！？

女 あの青蠅二才小、いちがな叩っ殺してやる！！

調教師。すっ飛びざま男を張り倒す。男は悲鳴を上げながらのたうち回る。

鞭が鳴り、男が吠え、次第に調教されていく。

調教師 (喘ぎながら) てこずらせやがって……、何が正義だ、何が裁判だ、脱獄囚のくせしやがって、笑わせるな。約束が違うだと。てめえら。自分を何様だと思っているんだ？ 怠け者のくせに、不平不満ばかり並べやがる。約束のどこが違うんだ！え？ 喰い物も着る物もちゃんとあてがってある。こんな快適な住居だってある。その上、指一本動かす訳じゃない。坐ってるだけで金になるんだ。

女 でも、学問がただで受けられるって……、

調教師 ガクモン？(ケラケラわらって)学問か。……ヒヒヒ。受けてるじゃないか、毎日。高尚な文化人類学の講義をな！おまえらには、ちよつとばかり高尚すぎるかも知れんがな。(倒れている男を蹴り上げて)起きろ！分かってるんだ、半分は芝居だってことは。余りにも幼稚すぎるからな。ゴネれば、ちつとは、ましな暮らしが出来るなどと思つたら大間違いだ。努力のないところに進歩はない。それがおれの信条だ。過保護なんだよ、おまえらはな。(怒鳴る)

さっさと小屋へ戻れ！

二人はあわてて小屋へ入る。

調教師

よし。それでよし。なかなかよろしい。すべからず動作は機敏でなければならん、

それが時代に対応できる最低限の必要条件だ。いいか！今は非常時だと思え！小異を捨てて大同につき、堪え難きを堪え、忍び難きを忍び、一億国民こぞって国難に対処しなければならんのだ。一旦緩急あらば、一命を投げ売っても国家に殉じる覚悟がなければならん。おまえたちは、まがりなりにも日本人だ！日本国民だ！だがまだ一人前という訳にはいかない。精神がなつとらん！

「仏作って魂入れず。」魂が入っておらんのだ！——たった今からおまえたちに、その魂を入れてやる。

おれの教育は厳しいから覚悟しておけ！（声を張り上げて）気をつけえ！礼！

たった今からおれの命令は、恐れ多くも天皇陛下のご命令だと思え！従って反抗は許さ

れない。絶対服従あるのみだ。——わかったか？これが日本的秩序意識というものだ。おまえたちも、日本人として、日本の文化を重んじ、伝統を尊ぶところを養わなければならぬ。日本的なものをこよなく愛し受け入れる心が肝要なのだ。

——それには先ず、言葉を何とかせにやあいかん。文化人類学では、言葉をして「文化の乗物」と言う。乗物に乗り遅れたら、等しく文化を享受することなど出来んちゆう訳だ。ま、それはとにかく、早い話が、日本語の使い方一日も早く覚えてもらわなければならぬ。古いことわざに曰く「習うより馴れる」。つまり、馴れなければならぬのラ。従って、たった今から方言の使用を禁止する。全面禁止だ。

これに違反した者は、これを首からぶら下げてもらう。

調教師が「リウキウ、チョーセンお断わり」と書かれた札を裏返すと「方言札」という、これまた稚拙な文字。男と女、一斉に鼻を鳴らし「あいなあ汚いさ」「ゆむふうじええ無えらん」などと不満の声。

調教師 うるさい！静かに。（誇らしげに）これは命令だ。

男・女 ……。

調教師 よしよし。それでよし。なあにすぐに馴れるさ。

この国では赤ん坊からお年寄りに至るまで、皆、日本語でしゃべっているんだ。大して難しいことじゃない。——ここだけの話だが、おれは琉球の方言が大っ嫌いなんだ。ミミズがのた打ち回っているようなとらえどころのない抑揚。粘つくくまとわりつくような発音。いんぎんで、傲慢で、難解で。顔と言葉がそれぞれ別なことを言っているのではないかと思えて仕方がない。それよりも何よりも、同じ日本国内に、我々の理解の及ばない言語があるということ自体、おれには我慢できない！日本人はすべからず日本語で話すべきだ。日本語で考え、日本語で語り合い日本語で笑い日本語で泣くべきなのだ。そうであれば一枚岩の団結など有り得ない。わかったか！

男・女 ……。

調教師 よし。それでは早速、日本語を教えてやる。おまえたちが真っ先に覚えなければならぬのは、これだ。威儀を正して良おく聞け！

(大音声で) 天皇陛下万歳！ 天皇陛下万歳！ 天皇陛下万歳！

——どうだ驚いたか？ 実に堂々たる響きだ。音の組み合わせといい、語呂の良さといい、雄々しさ、おさまりのよさ、安定感。典型的な日本語だ。

(男に) さあ、言ってみろ。

男 は、はい。(構えて) て、天皇陛下あ、バンジャーイ！

調教師 バンジャーイじゃない、バンザーイだ！

男 バン、バンジャーイ！

調教師 バンザーイ！

男 バン…、

調教師 ザーイ！満腔より敬愛の情を込めて！

男 バン…、

調教師 ザーイ！

男 ……、

調教師 ザーイ！…ザーイ！——情ない奴だ。貴様それでも日本人か。

ちゃんと言えるようになるまで、こいつを掛けとけ！（方言札を男の首にぶら下げる）
本日の授業これまで。気をつけえ、礼！

調教師退場。

取り残された二人は、しばらく「気をつけ」の姿勢のまま。

——やがて、二人同時に、

男・女 テイノーヘイカー、バンジヤーイ。

二人は吹き出し、笑い転げる。

ややって、男はなにかに気付き笑いやむ。続いて女も。

突然、男は女に猛然と襲いかかる。女は逃げ回る。

男 やな、ウンタクーは、ひゃあ！雷が落ちても絶対に誰にも言わないって言ってからにひ

やあ！

女 (逃げながら) 何言ってるかひや、大物言いしてからに、自分こそ何にも言い切れないくせしてからに！

男 何い！このアバサーガラサー！ヤナ、カンダバージョウグーひや。約束も守れんだから、おれにゲーする訳？叩っ殺してやるか？

女 出来るものなら、やってみなさい。ヤナ、ソーキブニ足ランヌーひや。

男 あね、クヌヒヤー！

男は空手の構えから、飛びかかる。が、口ほどに強くはない。女は逃げながらも軽くいなしたり、逆をついたりしている。が、相手が転ぶとすかさず押さえ込んでしまう。

男 あいたたたた……、離せ！この、百貫デブ！

女 トウヒヤア、ナマヤサ。トウ、チャースガ？何とか言ってみい！

男 ……た、担当さん！ベンゾお願いします。

女 ベンゾ？ああ、フルルか。おまえ懲役のくせしてクソもたれるのか？

男 （もがきながら）懲役も同じ人間じゃないかひや、おまえの糞とどこが違うか、よく見てみれ！

女 ……。やなポータギナーぬ、ゲレンモーターひや。

女は立上がつて、小屋に戻る。

男 あいたたた…。だあ、皮がはげているさもう。やな童あ本当にノシカカルからなあ。

腹が減っていないければ、あんなのチュバチなだけだよ。腹が減って力も出ないさ。

あの青蠅二才小「食べ物に不自由はさせません」と言うてからに、食べ物は毎日、芋ばっ

かしなんだからな。毎日、芋ばっかし。朝昼晩、芋ばっかし！

だあ、力が抜けて喧嘩もできないさ。

男も小屋に戻り、三弦を手にするにつまびき始める。

トウン、トウン、テエン、テエン……。

女も乗りかけるが、人の気配に気付いてやめ、男に「誰か来た」と合図する。

調教師登場。壇上に立ち一礼すると、おもむろにポケットから原稿を取り出し読み始める。「教育勅語」である。

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民
克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華
ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友
相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民
タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今
ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ

一二センチトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

音楽「雅楽青海波」の途中で、三線の調弦の音がはいり、曲調が乱れる。調教師もこける。すると、進軍ラッパが割って入り、行進曲が響き渡る。再び、軽快な三線の調弦の音。続いて琉球民謡「カチャーシー」が地軸を揺るがす。

調教師の「教育勅語」の朗唱は音楽に翻弄されて、踊らされる様。男は三線をほっぴりだして踊り出す。

——その昔、日本という国が戦争に熱中していた頃、兵士たちは、真夜中こっそり楽器を取出し、音を出さずに演奏にふけたという。あるものはギターを、あるものはハーモニカー、あるいはトランペットを、というふうに。

その時、響きわたったであろう無音の熱演を伝える実況録音盤は、世に無い。

ああ……！それが有りさえすれば、この世に氾濫する無数の畜音盤など、恥ずかしさ

のあまり縮み上がり、沈黙を余儀なくされたであろう――！

という訳で、わが陳列男の演奏は、その夥しい護国の亡者たちの怨念を、正しく世に伝える唯一の機会であり、かつ、重大な使命を帯びているということに自覚しなければならぬ。従ってその演奏はサイレントながらも、時に物悲しげに、時には物欲しげに、熱狂し沸立ち狂乱し、必要とあらば、かの琉球音階をも飛び越えて場内を揺るがす事となる。

当然のことながら、調教師の朗唱など、今は全く聞こえない。

一方、女の方も黙ってはいられない。初めのうちはしたり顔で合いの手を打っていたが、もはや、我慢がタマラナクなり踊り出した。かつての「毛遊び」もかくやとばかり、盛り上がった所で、急速に静まる。

どこか小学校の鐘に似た、懐かしい音が響いて、調教師が入ってくる。給食時間である。

調教師 (猫なで声で) さあ、皆さん。お待ちかね、お食事の時間ですよ。たくさん食べて、早く大きくなりましょうね。

食器を配る。薩摩芋の山である。

調教師 はい！産地直送、新鮮な薩摩芋！皆さんの大好物ですね。蛋白質に、でんぷん。カルシウムにカドミウム。栄養価満点、超デラックス版ですよ。

男は「またか、もううんざりだ。」という顔で、手をつけない。

女の方は、一向に無頓着で、いかにもうまそうにムシヤムシヤやりだす。

調教師 さあさあ、子豚ちゃん。そんなにガツガツしないで、良くカミカミするのですよ。あれあれ、あんなに散らかしちゃって。いけない子豚ちゃん。(男のほうを見て) おや、こちらの子豚ちゃんは珍しく、ちつとも手をつけてないじゃありませんか。どうしちやつ

たのかしら？好き嫌いはいけませんよ。嫌いじゃないんでしょう？

男
……。

調教師 そんな筈はありませんよ。お芋ちゃんは大好きだって、今朝だってちゃんと食べたじゃありませんか。いいえ、今朝だけじゃありません。昨日も一昨日も、そしてその前の日もそのまた前の日も、あんなに、モリモリ食べてたでしょう？それをそんなに急に嫌いになる訳はないじゃありませんか。理屈にあいせんもの。そうでしょう？

男
……。

調教師 (ムカツ腹を立てているのだが、平静を装って) ホントにしようのない子豚ちゃん……！後でパパに叱られても知りませんからね！(女に)……それにしても、大した食欲ですな。いやいや、構いませんよ。結構です、大いに結構。どんどんやってください。(汚い物でもつまむように、芋をつまみ上げ) こんな話をご存じですか？琉球人が内地に出稼ぎに来て、久し振りに里帰りした時のことなんですがね。数年振りにご対面するお芋ちゃんを、こんなふうに見て言ったんです。

「ふうん。これが芋というものですか……！それで？これをどうやって食べるんです

か？」って。(高笑いして)

それはさておき、あなた方も早くここの習慣に馴染まなければなりませんね。いつまでもこんなものを喰っているようじゃいけません。

それに、恩着せがましいことを言うようですが、この芋だって、今日では大変に入手難でしてね。手に入らないんですよ。北は北海道から南はフィリピン、タイ、ビルマ、南洋諸島に至るまで、ネットワークを誇るわが大日本株式会社の買出し班が、足を棒にして駆けずり回っているのですが、おいそれと手に入らないんです。苦労してやつと見つけても「これは豚の餌にするのだから駄目！」と断られる始末。いやはや、芋が豚の餌になるなんて知りませんでしたよ。全くの話。ひどいもんです。それにひきかえ、我々のお米は今や有り余っているんですからね。生産過剰なんです。皮肉なもんです。そうだ！そのうちあなた方にもお米のいただき方を教えてあげましょう。いやいや、ご心配には及びません。この国じゃ赤ん坊からお年寄りに至るまで、皆なお米で育っているんですからね。馴れますよ、じきにね。日本的秩序に従うことです。みるみる日本人らしくなりますよ。あつという間です。そのうちクサメも日本風に出来るようになるでしょう。(懇懃に、揉み手な

どしながら、女に近づき) どうやら、お食事もお済みになったご様子ですね。実は折り入っておねがいをしたいことがございましてね。エへへ……、なあに、大した事じゃありません。あなたの経験を生かして、そのちよつとした内職をやっていたいただきたいんですよ。つまり、平たく言えば、そのう……日本の防波堤になっていただきたい。ご存知でしょうか？ あちらのアメリカ館のニグロさんですがね。食事がすんだら日本娘を世話しろってきかないんですよ。困ってしまいます。何しろ、極東アジアの平和と安全のために、お止まり頂いているのですから、むげに断る訳にはいかないんです。お分りでしょうか？ 日本女性の危機を救えるのは、あなたをおいてはいないんです！ アンクル・サムの食欲と性欲を満たしてやらないことには、開びやく以来、連綿と培われて来た日本人の血が汚されてしまうのです。ね！ お分りでしょうか？ 日本人として、喜んで日本の防波堤になっていただきたい。お国の為です！ 何事もお国の為。引いては天皇陛下の御為……、

男、けたたましく、クシヤミする。

男 ファツクスウ！

女 （間髪を入れず）糞喰エーヒヤ！

調教師、何事力起リシナラム……？と、しばし呆然。が、――やがて、ムラムラと怒りがこみあげて来て、怒鳴り散らす。

調教師 き、貴様あ！あれほど言ったのに、まだわからんのか！

男を殴り倒す。さらに方言札をつかんで引きずり回し、

調教師 これは何の為にブラ下げてるんだ？この札は！あれほど方言を使っちゃいかんと言っただろうが！クサメも日本風にしなくちゃいかんと教えただろうが！ファツクスとは何だ！ファツクスとは！ハツクシヨンと何故言えない？

反射神経がなつとらんだ！精神がたるんだ！クスクエーヒヤーなどは、もつ

ての他だ！汚い！

男は、女の方を指さして何か言おうとするが、そんな事などお構いなし。

調教師 貴様、それでも日本人か！日本国民か！恥を知れ！

ひととおり悪態をついて、やっと平静に戻る。

調教師 （肩で息をしながら）よし。もういい。席に戻れ。戻って喰え。

男はやっこの思いで席に戻るが、食べない。

調教師 ……どうした？何故喰わん？早く喰え。

男 ……。

調教師 (にらみ据えながら) どうしたんだ？遠慮はいらんぞ。喰ってみろ。

調教師は芋を取って、男の鼻先に突きつける。

調教師 さあ、一口喰ってみろ。え？ひとくち口に含むと、でんぷん質の唾液が、たちまち

口中一杯にパアツと広がって、何とも言えない甘味だぞ。さあ喰ってみろ。

男 ……。

調教師 どうしたんだ一体？しょうのない奴だなあ。(再び猫撫で声で) わかった！食前の

お祈りをしているんでしょう？「神様、仏さま、今日も生命の糧をお与え下さいまして、

ありがとうございます。兵隊さんありがとうございます。お父さんお母さん、ありがとうございます

ございます。いただきます！」って。

男 ……。

調教師 お祈りがすんだら、ちゃんといただくんですよ。(女に) ハハハ……、性分でね。

ちつとも悪気はないんだが、腹たちまぎれに、つい途方もない事を言い出すもんだから、

よく誤解されてね。おかげで損ばかりしている。未だに出世できない始末さ。

（男女の顔を見回しながら）ここだけの話だがね、実を言うと、おれにも栄転の話があったんだよ。それも、専務じきじきのお声がかかりでね。嬉しかったねえ、ハハハ……、まあ飲めよ。

音楽と共に照明が変わり、どうやら、一杯飲み屋のムード。

女はお酒（お茶でもいいが）など注いでやる。

調教師

専務じきじきにね「君でなければ勤まらないから、よろしく頼むよ」と言われたんだ。思わず涙がこぼれたね。苦節十年！おれにもやっと報われる時が来たんだと思うとね、不覚にもこみあげてくるものを禁じ得なかった。わかるだろう？長い下積み生活の苦しさを、やりきれなさ。それは言葉ではとても言い表せない程、苦渋に満ちたものだった。しかし、それももう終わりだ。これからは新しい生活が始まる。陽の当たる充実した生活が。ハハハ……、おれは希望に胸をふくらませたものさ。まるで、そんじよそこいらの新

入社員みたいにさ。天にも昇る思いだったよ。ハハハハ……。

酔ってきたらしい。だんだん眼がすわってきた。がぶ飲みするからだ。

調教師　——それが、たちまちドンデン返しさ。天の高みから地獄の底まで突き落とされたんだ。たった一夜のうちにさ。「適任だと思ったんだが、いろいろあってね。ま、この話は無かった事にしてくれ」——おれは知ってるんだよ。何もかもお見通しさ。「社長、あいつは、どうもリュウキュウらしいですよ」って抜かしやがっただろう！「リュウキュウじゃ、どうもね」「どうりでどこか違うと思った」「奴ら、やっぱり南方系でしょうかね」——色が黒くてなぜ悪い？古狸め！おれは琉球人なんかじゃない！断じて琉球人なんかじゃないんだ！……ただ、似てるというだけじゃないか！

女　（慰め顔で）人間、誰にだって、悩みはあるさね。

男　ぼくも、子供時分は、マヤーに似ていると言われたよ、ガチマヤーに。

女　ウリウリ兄さん、酒小飲んで。ウリ。

調教師 有難う。いい奴だな、君達は。本当にいい奴だ。おれみたいな者に良くしてくれる。

覚えておこう。いつかきつとお返しをしてあげるからな。持つべきものは真の友だ。(方言札に気付いて)なんだ君。いつまでこんな物ぶら下げているんだ。ハハハ……、本当に真っ正直な男だな、君は。おれが本気で怒ったとでも思ったのかい？冗談さ、ほんの冗談。取っちまいなよ、そんなもの。よし、おれが取ってやるよ。

調教師は、男の首から方言札をはずしてやる。

調教師 さあ、これでよし。これでこそ真の友だ！さあ飲もう。飲んで喰って大いに騒ごう。
ささ、喰ってくれ。

調教師、芋を差し出す。

男はつられて思わず受け取ってしまう。が、食べない。

調教師 喰えよ。おれのおごりだ、じゃんじゃん喰ってくれ！

男 ……。

調教師 喰えよ、な！頼むから喰ってくれ！——（憎悪にうちふるえ）……何故だ？何故喰わない？（爆発して）貴様ア！

調教師は男の胸ぐらを取り、投げ飛ばす。

照明が変わり、場面はどこかの取り調べ室となる。

調教師 一体、いつまで断食を続ける積りなんだ、貴様ア！え？断食すれば、おれが震えあがるんでも思ってるのか！貴様が死ねばおれが困るとでも思ってるのか！甘ったれるんじゃない！貴様みたいな虫けらの一匹や二匹、なぶり殺しにしたってどうと言う事はないんだ！調書の一枚や二枚、どうにでもなるんだよ、この野郎！半丁前のくせしやがって何様の積りなんだ！え？言ってみろ！貴様は何者だ？言ってみろ！言わねえのか、この野郎！さあ言え、貴様は何者だ？

男 ……に、人間……、

調教師 何イ？

男 人間、誰にでも話したくない事が、あります。誰にも聞かれたくない事が、あります。

調教師 だから、何だ？

男 だから、諦めて恥を忍んで、黙っている訳です。

調教師 何だとう！この野郎。ふざけるんじゃないやねえ！そんなやわな気分で黙秘権を使われてたまるか！なめるんじゃないやねえ！

男 ……。

調教師 いいか、おれをなめるなよ。おれを誰だと思ってるんだ！おれはそんなじよそこいらの生っ白い東大出のエリートと違ってな、現場で叩きあげて来たんだ。実戦派なんだよ。だから、どんなに口の固い政治犯でもおれの手にかかったらおしまいさ。みんな、ゲロを吐いちまうんだ。イチコロさ。わかったか！わかったらさっさと吐いちまえ！貴様は一体何者だ？

男 わ、わ、わかりません。私には何もわかりませんです。

調教師 何イ！何がわからないんだ？

男 自分は子供の頃、標準語が上手に使いきれないので、方言を使ったら、罰として便所掃除をさせられました。小学校の便所は汚くて臭くて何度も吐きそうになりました

調教師 あのなあ、おれが吐けって言ったのはだな……、

男 戦時中、自分は何度も吐きました。人間はおそろしくなると吐くんです。一日中何も食べなくても、お腹の中の物を全部……

調教師 貴様あ、俺の言ってることがからんのか。

男 (手で示し) こ、こんな丸太ん棒で、あ、頭を叩いて殺しているんです。親が子供を。

何度も何度も叩いて、叩いて……。私も、落ちていた棒を拾って、殺しました。

調教師 ……何イ？

男 あたりは一面、血の海でした。川の水まで真赤に染まって……。みんな鍬や鎌、丸太ん棒などを手に持って殺しあっているんです。子供が年寄りを殺し、その子供は親が殺し、自分はカミソリで首を切って、それでも死に切れずに頼むんです。「殺してくれ、殺してくれ」って。

調教師 ……。

男 自決用にと、友軍から渡された手榴弾は、前日來のものすごい雨のため、湿気を帯びてなかなか発火しませんでした。しかし、それが反って悲劇を凄まじいものにしたのです。あっちこっちでひとかたまりになって、身内同士、親しい者同士が殺し合いを始めたのです。何にも殺す道具のない者は、手で首を絞めて……。怖かったんです、みんな。生き残るといことが。一人だけ生き残るといことが、恐ろしかったです。

調教師 もういい！ 沢山だ、その話は。

男 鎌で首を切られた女の人が血まみれになって、それでも死に切れず、私の手をつかまえて離さないんです。首を切られて、声も出なくなつて……。それでも必死になつて頼むんです。「殺してくれ！ 早く殺してくれ！」

調教師 沢山だといつとるんだ！

男 島では、戦争で死んだ人は三十人余りでしたが、集団自決で亡くなった人は四百人余りでした。ですから……、

調教師 黙れ！ やめろ！ これ以上しゃべると一生ここから出られなくなるぞ！

女がスポットライトに浮かび上がる。

女 　どんなカラクリになっているのか、わからないけどさ。どんどん前借金が増えていく訳、どんなに働いても。毎月、衣装代とか化粧代とか引かれるさね、チリ紙代とか。あれもこれも全部引かれて、何にも残らん訳。だからいつまでたっても前借りが減らない訳よ。ええ、病氣して休んでも罰金取られるんだよ！五ドルとか十ドルとか。病氣してもよ！病氣したら、ただでさえ物入りさね、薬代とか、医者代とか。それなのにその上、罰金まで取られるんだよ。

調教師　黙れと言ってるんだ！

女　ベトナム帰りの兵隊は、ものを思わないさね。それにヘンタイの兵隊が多い訳。うちらなんかの仲間でも殺された者がいるよ。ええ、まっ裸にされて、首絞められてさ。死んでいる訳よ。かわいそうだったさ。うちなんか、すぐ隣で客取っていたけど、何にも気付かなかったさ。兵隊は何時でも大声出すし、口が汚いさね。「死ね！」とか「殺してやる！」とか。いちいち本気にはしないさ。だからふざけていると思った訳よ。ふざけて、遊んで

いると思った訳よ。だけど本当に殺していた訳。

調教師 黙れと言っているのが聞こえんのか！

ハリ倒す。すると別の一角に男が浮かび上がる。調教師静かに退場。

男 「おまえたちは日本人だ」と教えられ「日本人として国を守る気概を持って」と言われて、友軍と共に最後の最後まで戦い抜く覚悟でおりました。しかし、頼みの友軍は戦局が不利になると、本性をむきだしにし、壕から壕へにげまわっておりました。民間人を壕から追出し、民家から食糧や酒をかつぱらって来ては宴会をやったり、「沖繩の奴らはどいつもこいつもアメリカのスパイだ」と言っていて、見せしめに若い女性を殺して、その死体をさらしものにしたりにしておりました。無口ゆえにスパイの嫌疑をかけられ、処刑された者もおりました。

女 毎月、ペイデーになると、兵隊は町中にあふれ出す訳さ。そうしたらもう大変、うちらなんかの所も一杯して、並んで順番待ってる訳よ。ベトナムブームだったさね。お金なん

か、ええ、チャーバンナイ、ポリバケツに放り込んでいたんだよ。お店の金庫は小さくて役に立たない訳。その代わりうちらなんかは大変さ。足腰が立たなくなるまで客をとらされたんだよひゃ。

男 本部国民学校の校長先生は、戦火を避けて御真影を奉持され、友軍陣地に立ち寄ったところ、友軍によって射殺されました。天皇陛下の写真を安全な場所に安置してもらおうとして、殺されてしまったのです。天皇陛下の写真なんか、焼いて捨てればよかったのにと、悔やまれてなりません。

女 兵隊だからといって、みんなが皆、ボーチラーじゃないさあね。かえってかわいそうな位さ。特に黒人なんかさ。誰からも相手にされないさね。「マミー、マミー」って泣くのもいるよ、子供みたいに。

男 敵は鬼畜米英だけではなく、友軍でさえ気を許す事ができなかったのです。いや、友軍こそが、真の敵だったのです！

突如、襲いかかるジェット機の音。地軸を揺るがすように。

男女は、怯えてうずくまる。

——と、どこからか吊いのような太鼓のリズムが沸いてくる。
男女は、その太鼓の音に操られるように、歌い踊る。

「京太郎」

一万石ヌ　ウスデーワーサミ　一万石ヌ　ウスデーワ

一万一石一斗一升一合一サク一サチマーリヤ

ミミノフアーニウサミテイー　ウキトウリワタシヌ　ターマイタ

ターマイタークヌ　ターマイタ

サントウリサーシヌ　ミーサイナー

サントウリサーシヌ　ミーサイナー

クンニンテイワ　十六タンサミ　クンニンテイワ　六タンブ

黄金ヌナンジャモ　宝モ　チチキューテイヌ　アーワシタ

サントウリサーシヌ　ミーサイナー（繰返し）

四日ヒニワサミ 四日ヒニワ ユタカクンガラサ アヌ松又下ニ

ガラサーガル イーチョル ガラサーガル イーチョル

羽又下カラ アーシタ マーガル トウイチマ

スリテイヌ スリテイヌ ウットウイタークヌ ウットウイタ

サントウリサーシヌ ミーサイナ

サントウリサーシヌ ミーサイナ

サントウリサーシヌ ミーサイナ

サントウリサーシヌ ミーサイナ

調教師 本日は当精神病院へ、ようこそ、お越し下さいました。当院は設備、陣容共に東洋

一を誇る、現代日本の精神医学のメッカでございます。従いまして患者さんの数も多く、

北は北海道から、南は遠く九州、琉球に至るまで、ローカル色豊かな患者さんを取り揃えてございます。ご承知の通り、精神病患者は、社会の異端者であり、平和な日常へのチャ

レンジャーであり、潜在的な犯罪者とされておりす。

しかしながら、彼等を敵視したり、軽蔑したりしてはいけません。彼等も同じ人間なのです。病める人間なのです。彼等は精神の防波堤で虚しく敗れ去った敗残兵なのであります。彼等に必要なのは、差別や過保護ではなく、真に人間的な魂の救済であります。つまり、大和魂の復活こそ、彼等の求めてやまない願望なのであります。

ご覧下さい。こちらは沖繩館でございます。沖繩は精神病患者の発生率において日本一を誇っております。収容施設の貧弱さもまた日本一であります。

何故に、沖繩に精神病患者が最も多いか？それは歴史の転回点において、常に彼等が精神の最も奥深い所、すなわち、魂の深淵において、苦悩しているからであります。

（男を指して）こちらがその典型的な症例であります。重度の躁鬱病患者であります。

（女を指し）こちらはパラノイア、偏執病。いうところの色情狂ですな。いつでも自分が何者かに襲われているという被害妄想を抱いております。

両方とも、戦争後遺症患者であります。戦時中の悲惨な体験に怯え、戦時下の生々しい恐怖にさらされて、いたいけな魂が脆くも崩れ、精神の破綻を招いたのであります。

「沖縄の復帰なくして、日本の戦後は終わらない」と言った総理大臣がおりましたが、彼等にとつて、戦後どころか、いまだに戦争は続いているのであります。

いきなり、凄まじい爆発音。

男と女は逃去り、調教師は反射的にその場に伏せる。

調教師 ……チクショウ！またやりやがった！（立上がつて、観客に）お静かに願います。

どうか、お静かに。ご心配には及びません。大丈夫。例のベトナム帰りのアメちゃんが、ちよつと悪ふざけをしただけですよ。からかっているだけなんです。

しよつちゆうなんですよ、こんなことは。全く人騒がせな連中です。悪意はないんですが、戦争馴れしているせいでしょう。賑やかなのが好きなんですな。可愛いもんです。いやいや、爆竹ぐらいなら、可愛いものですよ。それはびっくりはしますが、それだけの事です。からな。中にはたちの悪いのがいましてね、催涙弾や発煙筒をなげこんだりするのがいるんです。——それどころか、手榴弾を投げ込まれたこともあるんですよ。戦場と間違えて

いるんですな。とんだトバツチリです。

さて、と……、どこまで話しましたかな？あつ、そうそう戦争の話。（大きく息をついて）フウ、まだ心臓がドキドキしている。

えー、これら戦争後遺症による精神病患者の、想念の中で渦巻いている戦争を、いかにして終わらせるか。これが今日、我々の最も重要な課題であります。わたくしをして言わしむれば、彼等の社会復帰なくして、日本の大東亜戦争は終わらないのであります。

再び激しい爆発音。それと共にセットの一部が壊れ、煙が立ちこめる。

調教師は悲鳴を上げながら逃げ去る。

遠くで爆撃の音。しばらくして、女が転がるように駆け込んでくる。

女 （敬礼して） 姫百合部隊から参りました。曹長殿、炊き上げにかかりますので、火種を下さい。

調教師 （くわえ煙草で現れ） ……何？

女 本日の炊事班です。炊き上げにかかりますので、火種を下さい。

調教師 ヒダネ？（女の体をねめまわし）ああ、火種か。（煙草を踏み消す）火種は、……

無い。火種は無いが、子種ならある。子種をやろう。

女 ……はあ？

調教師 子種をくれてやろうと言ってるんだ！（飛びかかる）

女 （抵抗しながら）いりません！結構です！

調教師 遠慮するな！おれの子種は、とびきり上等だぞ！生粋の日本軍人の血だ！有難く

思え！

女 やめて！やめてください！

あわやという時、男が飛込んで来る。

男 隊長殿！鉄血勤皇隊であります！鉄血勤皇隊は、ただいまから、斬り込みに行つて参り

ます！

調教師 よし！（行きかけるのへ）ちよつと待て！

ポケットから煙草を出して勧める。

男 せっかくであります、自分は煙草を吸いません。

調教師 バカモノ！これはただの煙草ではない。気をつけえ！恐れ多くも、天皇陛下から下された、恩賜の煙草である！有難く頂戴しろ。

男 はい！有難く頂戴致します！

男がうやうやしく受取ると、調教師は火をつけてやる。たちまち、ゴホゴホとむせる。

調教師 どうだ、うまいか？

男 はい。涙が出る程、おいしくあります！

調教師 よし！それでこそ日本男児だ。後顧の憂い無く、勇ましく死んで来い！おれもすぐ

後から行く。靖国神社で逢おう。

男 それでは、お先に参ります！

男、退場。

調教師は、中断された作業に戻る。女は依然として抵抗をやめない。

調教師 貴様！帝国軍人に逆らうのか！おれの命令は、気をつけえ！恐れ多くも、天皇陛下の御命令である。

女 職権乱用です！

調教師 うるさい！おれたちは命がけで、貴様たちの郷土を守ってやっているんだ。このくらしいの楽しみは、当然の権利というもんだ。

女 私達だって、命がけで戦っているんです！私たち女子挺身隊は、兵隊さんに負けぬよう、一生懸命……、

調教師 問答無用！

また、男が飛込んでくる。

男 (敬礼し) 連隊長殿！郷土防衛隊であります！

調教師 (返礼をして) よし！

男 郷土防衛隊は、今夕マルマル時を期して、敵の包囲網を突破、反撃に転じます！
以上、報告終わり！

調教師 よし！（行きかけるのへ）ちよつと待て！いいか。良く聞け！我が部隊は明朝、北部方面へ転進する。日夜、激戦につぐ激戦で兵たちは、疲労困憊しておる。もはや、防衛隊の面倒は見きれない。従って以後、独自行動をとるように。わかったな！

男 ……？

調教師 血の巡りの悪い奴だな。つまり、死に行くのにいちいち報告などせんでもよろしいと言うことだ。わかったか！

男 (くやしそうに唇を噛む。が) ……わかりました。(行きかける)

調教師 待て！気をつけえ！

男は、金縛りにあったように、身動き出来なくなる。
そんな男を調教師は、じつくりといたぶりはじめる。

調教師 貴様、本当に、防衛隊の者か？

男 は？

調教師 はあじゃない！おれの言うことがわからんのか！貴様、名前を言ってみろ。

男 （極度に緊張して）は、はい！自分は、郷、郷ろ防衛隊、そ、そ属……、

調教師 何だあ？

男 はい！自分は、郷、郷ろ防衛隊の……、

調教師 郷・土・防衛隊だ！

男 もとい！郷、郷、郷……、

調教師 貴様、本当に日本人か？

男 はい！本当に日本人であります！

調教師 天皇陛下万歳と言ってみる！

男 (ますます緊張して) テ、テ、テ、……、

調教師 どうした？

男 (絞りだすように) テ、天皇陛下ア、バンジャーイ！

調教師 バンジャーイじゃない！バンザーイだ！

男 バン、ジャーイ！

調教師 ザーイ！

男 バン……、

調教師 ザーイ！

男 ……、

調教師 ……ザーイ！……ザーイ！……ザ、

調教師、怒って男を張り倒す。

調教師 怪しい奴だ。貴様はスパイだろう？

男 （あわてて）いいえ！私はスパイではありません！私は郷ろ防衛隊の……。

調教師 いいや、貴様はスパイだ。

男 私は決してスパイではありません！私は……、もとい！自分は……、

調教師 黙れ！貴様は、ここを探りに来たスパイだ。貴様がここから一步でも外へ出たら、たちまちこの壕は、集中砲火を浴びせられる。そうやって全滅させられた陣地壕を、おれはいくつも見てきて良く知っているんだ。

男 自、自分は決して……、

調教師 黙れと言つとるんだ！（軍刀を引寄せ）こうなったら、貴様をここから生かして帰す訳にはいかんな。

男 （震えあがつて）助けて下さい！本当に自分はスパイではありません！自分はただ、無口なだけなんです！

調教師 問答無用だ！

と、刀を抜いてふりかざす。

男は後ずさりしながら、

男 (必死の思いで) テ、テ、テ、天皇陛下ア、バンジャーイ!

調教師 天誅!

斬る。

男はのけぞってバツタリ倒れる。その一部始終を見ていた女は、悲鳴をあげて男に駆寄り、とりすがって泣く。

女 ひどい! 何というひどいことを! あんまりです! 何の罪もない者を……!

この人はスパイじゃありません。私の夫です! 私の夫はスパイなんかじゃない! それなのに何故殺したんですか!

調教師 (抜身をぶら下げたまま) こいつは、おまえの夫か?

女 (激しく泣いている)

調教師 そうか。……するとおまえは、たった今、後家さんになった訳だな。かわいいそうに。

二十歳後家はたつても、三十後家はたとんと言うぞ。おれが慰めてやる。

女 やめてください！やめて！

調教師 おとなしくしろ！

再び、飛びかかる。

と、つんざくような赤ん坊の泣声。

調教師は、仰天して飛び起きる。

調教師 誰だ！赤ん坊を連れているのは！赤ん坊を泣かすな！敵に感付かれてしまうじゃないか！静かにさせろ！

泣声はますます激しくなる。

調教師 （狼狽して）静かにと言っているのがわからんのか！子供の泣声は敵の電波探知機にひっかかってしまっただぞ！早く黙らせる！口をふさげ！殺すんだ！早くしろ！

激しい赤ん坊の泣声。

調教師 ええい！どけどけ！おれが黙らせてやる！静かにと言っているのがわからんのか！

調教師は刀を拾うが早いか、すっ飛びざまに、倒れたままの男を串刺しにした。

赤ん坊の泣き声が、ピタリと止んだ。

女 （悲鳴と共に駆け寄り）ひどい！……、何というむごたらしいことを！相手は、ほんの赤ちゃんじゃありませんか、何の罪もない……。それを泣いたからといって殺すなんて。それでもあなたは人間ですか！

調教師 何い！バカモノ！何をたわけたことを！こいつは、とてつもない声で泣いたんだ

ぞ！敵に知れたらどうする！我々はどうなる？一人残らず皆殺しだ！それくらいのこと
がわからんのか！バカめ！こいつは、我々の所在を敵に通報しようとした。こいつはスパ
イだ！

呆然と放心したようにすわり込む女。

調教師 死んでしまった者を、いまさらどうする？いくら嘆いてみても、どうにもなるま
い？それよりは生きている者の供養が先だ。なあに、赤ん坊なんてすぐまたできるさ。
おれが仕込んでやる。

気力を失った女を、調教師は引きずって行こうとする。

倒れていた男がバネ仕掛けのように勢い良く立上がる。

男 戦隊長殿！郷ろ防衛隊であります！

調教師 （舌打ちして）何だ！

男 戦隊長殿！島の住民は、ことごとく西山盆地に集結させました！次の命令を戴きたく
思います！

調教師 消えてなくなれ！

男 ……はあ？

調教師 わからんのか。消えてなくなれと言っているんだ。

男 ……

調教師 （癩癩を起こし、手近にある物を掴んで投げつける）おれの言ってる事がわからん
のか！貴様達は、邪魔なんだよ！作戦の妨げだ。足手まといだ！どいつもこいつも役立た
ずの能なし野郎だ！わかったか！

男 （ブルブル体を震わせていた、が）わかりました、戦隊長殿。我々は、友軍の持久戦の
妨げにならぬよう、潔く消えてなくなります。

男は去りかけて立止まり、振向く。

男 戦隊長殿。

調教師 まだ、グズグズしているのか！

男 あのう、武器を貸していただけないでしょうか？

調教師 ふざけるな！貴様らに貸してやる武器など、ここには無い！

男は黙ってあたまを下げ、去りかけるが、また、

男 戦隊長殿。

調教師 ……！

調教師、いまや怒り心頭に達し、男がもう一言、何か言おうものなら、その場で斬り捨ててやろうと、睨み据えている。

男の方は、そんな事などまったく意に介せず、調教師をジロジロと見詰め続けている。

意味のわからない間———

男 (ややあって) カマー？

調教師 (虚をつかれて) カマ？…… 鎌なんか、無い。

男 カマーやあらに？ 汝や、カマーやあらに？

女も加わり、調教師の体を撫でまわす。

女 やんてー、カマーやんてー。カマー、汝や我わからんなー？

男 我どうやしが、カミーよ。新家下中門小ぬ、カミー。

女 我ねー、ウシーどうやんどお、竹葺家ぬウシー。

調教師 (感きわまって) ウシー婆エーカミー兄イ！

男・女 カマー小！

ヒシと抱合う三人の目に涙。

どこからか「トロイメライ」が聞こえてくるかも知れない。

女 アキヨー！カマー小よ、カマー小！汝やな！新大和小けー成てい、見い知ららん成とー
るむんなー。

男 あんやさ。なまねー学校ぬ先生ぬ如どうある。

女 我達ややー、戦さに打ち喰わあつてい、親兄妹んむる失なていーねーらん。後生行じや
ーに、行逢りわるやるんでいどうおもうとーたる。くぬ世長らえてい、汝、行逢いる日
い
ん有てーさやー、カマー小！

調教師 泣ちんそーらんけーなー、ウシー婆。かんねーる、ゆむ戦さに行ち当てい、顔、姿
までい打ち変わてい、哀りぬ段々しみそーちえーさやー、婆。

男 山原んかいん逃ぎいる道しがら、親戚んちやーや居らに、兄弟んちやーや有らにんち、
倒りとおるちゅんちやーん、けーみーみいしどう歩っちちやる、汝や、生ちちよーてーさ
やー、カマー。

女 (祈りながら) ああとうとう。うしでい果報ぬ事でーびる。

調教師 やしが、カミー兄。うんじゆなーや、我達ウサ小とう、一緒やあいびらんたんな？

ウサ小や、ちゃーさびたが？

男 ……。

調教師 ……ウシー婆！

女 ……。

男と女は、顔を見合わせていたが、思い切って、

女 カマーよ。泣ちんさん如、くぬ婆が言ゆる事、良う聞きようやー、カマー。汝、妻ぬウ

サ小や、山原かい逃ぎーる道中、くぬ世失なたんどーやー、カマー。

調教師 ウサ小がな、我達ウサ小が！

女 艦砲ぬ雨に追わつてい、壕ぬ中んかい入らんでいしーねー、大和ぬ兵隊に追わありーい、アキヨー！何ぬ罰冠んてい生りたるむんやが、んでいる思うたるやー、カマー小。やしが、

汝達ウサ小や、胴ぬ哀りん哀りんできや思あん。とうーち汝事びけーじ、心配どうそーたんどーカマー小。

調教師 ウサ小！あいえーよ！汝や、情え無えらん。我一人打棄やん投ぎてい、死じやんでいーなーウサ小！

調教師は、大地を叩き、泣き叫ぶ。

女 何日なぎな、汝行逢やて、話する事ん有いがすら、んでいる思うとーたる。此所うてい

汝行逢たしん、ウサ小が引合あしがやら、わからんどうやー。

男 やしが婆よ、何時までいん話ぶしややあしが、あにんならんむん、我達やなー通らな

女 あんやさ。此所うてい、長話っし、大和ぬ兵隊んでーに見当らりーねー一大事。

カマー、体大切にし、逃ぎーるすんどー。我達やなあ行かい。

調教師 婆、兄。知らち呉んそーち、にふえーやいびーたんどーなー。

男 頑強うさやー、カマー。

調教師 兄、あんしにっただーや、何処んかい参んしえーが？

男 ……。

調教師 何処んかい参んしえーがなー、婆。

女 ……。

調教師 我んにん、まんじゅーん添うてい参んそーれー。

男 カマーよ、添うてい行ちぶしやあしが、我達やよ！…、

女 汝、添うてい行かりーる所んかいや、有らんどうあんでー。

調教師 添うてい行かりーる所あ有らん？

男・女 いい。

調教師 ぬうが、何処かい、やみしえーがなー？

男 唐旅かい。

調教師 唐旅？

男・女 ……。

女 我達やよーカマー。親兄弟一人ちよーん居らん。むる戦さに持っち行かりやーに、居ら

んなとーん。くぬ先、長れーてい居ていん、ゆちらー無えらんむんぬ、なあ後生行じ、親ふあーふじ行逢てい来うる肝えーどうやんどーやー。

調教師 後生んかい……。

男 先ならいーなー。

男女が行きかける。

調教師 待っちようちみそーれーなー、兄。婆。(しばし思いあぐねた末) 我んにん、添うてい参んそーれーなー。

女 まじゅーん、行ちゆみ？

男 ウサ小、前んかい？

調教師 うう。

男 とうとう、あんしえーまじゅーんならやー。やしがカマー。後生かい行きわるやるんてい思うていん、鉄砲一ちんちようん無えらん。何処がなうてい、鎌んでーん探てい来うん

ねーならんむんぬ、とう通れー。

調教師 待っちよーちみそーれー、兄。我が此処んかい、うね！

何やら取出して差出す。

男 ぬーやが、うれー？

調教師 テリユードンよーなー！

男・女 (驚いて) テリユードン！

調教師 うう。

男 とうとう、良い物有てーさ。(受取って) 此りが有れー、何ぬ苦ちさん無えらん。三人
なぎーなー、揃てい後生んかい行かりーさ。とう。

三人は、一ヶ所に寄添い、それぞれ思い思いに死に支度を始める。

女は祈り(御願?)をひとしきり唱える。

男 (ややあつて) カマーン婆ん、覚悟う、ゆたさみ？

女 (手を合わせたまま) いい。

調教師 (同じく手を合わせ) うう。

男 恨みてーしまんどーやー、カマー。我達御元祖ぬ、草葉ぬ陰から見守てい呉みせーる筈。
迷いんさん如、我、後から追うてい来うよーやー。

女 ウートートウ！

調教師・男 アートートウ！

男は手榴弾の安全弁を引抜き、大地に叩きつける。

閃光一閃！爆音轟き、骨肉四散、この世の修羅場が……、と思いきや、爆発しない。

男はあわてて、叩いたり、こすったり……。それでも、爆発しない。

女は、あきれて見ている。

調教師は、笑いをこらえるのに必死である。

手榴弾は無残にも皮がむけ、中身がこぼれ落ちる。

それはこんがりとよく焼けた芋である。

男 一大事。テリュウダンぬ芋なていねーらん。

女 テリュウダンぬ芋ないる訳ぬあみ。テリュウダンでい言せー、あれー人ぬ命取いしどうやる。やし（芋を指し）うれー人ぬ命助きーし。

調教師 ハハハハ……。馬鹿奴！貴様らにそう易々と死なれてたまるか！貴様らに死ぬ権利などない！まだやる事が山ほど残っているんだ！

男女とも放心したように座り込んでいる。

突然、スピーカーの音が壕内に入り込んで来る。たどたどしい

日本語の、アメリカ人の声である。

声 ニッポンノ、ミナサン。戦争ハ終リマシタ。武器ヲ捨テテ、壕カラ出テキナサイ。

調教師 畜生！デマ宣伝だ！

声 水モ食べ物モ沢山アリマス。早く出テキナサイ。

調教師 騙されるなよ！これが奴らのやり口なんだ！

声 アメリカ軍ハ野蛮人デハアリマセン。決シテ危害ヲ加エタリシマセン。武器ヲ捨テテ、
両手ヲ上ゲテ出テキナサイ。

調教師は、異常なまでにうろたえている。

スピーカーの声は続いている。

調教師 (男に) 貴様、服を脱げ。

男 はあ？

調教師は、自分も着ているものを脱ぐと、男の服と着替えてしまう。

調教師 いいか。おれはここから、自力で脱出する。そして敵の背後にまわって奇襲攻撃をかける。最後の一兵たりと言えども決して、敵に後ろを見せない。これが軍人魂だ。おま
えたちも、最後の最後まで決して音を上げるな！日本人として、生きて虜囚のはずかしめ
をうけるな！わかったな！

男 自分たちも一緒に連れて行って下さい！

調教師 ……何を言う？馬鹿な事を言うな！

男 決して足手まといにはなりません！一緒に死なせて下さい！

女 私たちも一緒に死なせて下さい！お願いします！

投降勧告を繰り返していたスピーカーの音が、ピタツと止む。

調教師 （態度がガラツと変って）何を言うんだ。死んでどうする？今、死んでどうするんだ、え？その若さで。（女の肩に手をおき）元気を出すんだ。生きるんだよ、宮城君。大
城君も。

女　しかし、先生。生きて虜囚のはずかしめを受けるより……、

調教師　しつかりするんだよ、又吉君！耐えるんだ。……耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、百万県民、島ぐるみで立ち上がらなければならないんだ。ここで死んだら、それこそ犬死にだよ、君。

男・女　（厳しく）先生！

調教師　（意に介せず）ご覧。見渡す限りの焼野ヶ原だ。私たちの郷土は、文字通り焦土と化してしまった。――何もありはしない。あるのは、焼けただれた土くれだけだ。だが、鉄の暴風雨に叩かれたこの大地からも、やがて、芽を吹く時が来るだろう。

緑の山野が蘇るのだ。そう！新生沖縄県が誕生するのだよ！

男・女　先生！

調教師　新生沖縄県の将来は、一に君たち若い者の双肩にかかっている！なるほど死ぬのは易しい。だが、生きて郷土の再建に命をかける事は、どんなに難しく、また有意義な事か！わかるかね、喜屋武君！仲村渠君！（「沖縄を返せ」の大合唱が聞こえてくる。）たとえ異民族支配の憂き目を見る事はあっても、日本国民として、人類普遍の原理に基づき、

民主的で文化的な国家及び社会を建設して、世界の平和と、人類の福祉に貢献しなければならぬのだ！

ほら、祖国はすぐ目と鼻の先にある。あの二十七度線の向うは母なる祖国、かがり火燃える与論島だ。さあ、行くんだ！草むす屍を乗り越え、水漬く屍をかきわけて、現身神の国、ニッポンへ！

「沖縄を返せ」のシュプレヒコールに混じって、ジグザグデモのかけごえ、機動隊のスピーカーの声などが入り乱れて聞こえてくる。

男と女は、アジられて燃えたのだろう、腕を組んで飛び出して行った。

調教師 ……行ってしまった。誰も彼も行ってしまった。だが、これでいいのだ。（空を見据えて）歴史が、真実繰りかえされるものならば、未来よ！何もかも焼き尽くして滅びてしまいがいい！おまえの似姿さながらに、しつらえられたこの額縁も、いずれは記憶の底に沈んでしまうほかないのだ。歴史は時として人を欺く。欺きつつ警鐘を鳴らし続けてい

るのだ。

歴史が真実繰り返されるものならば、芋で綴られた人類の歴史もまた。終わる事はないだろう。

調教師は、落ちていた芋を拾い上げる。

調教師 何というグロテスクな面構えをしているのだ。せめておまえが、林檎や梨のような、

愛らしい形をしていたならば、沖縄の歴史もまた、変わっていたかも知れないものを：

…。さよなら、お芋ちゃん！

調教師は、芋をガブリと一口喰いかじった。が、たちまちそれを吐き出し、いまいましげに、芋を地面に叩きつける。

——と、何と、凄まじい轟音とともに、芋が爆発！

調教師は死ぬ。

無理もない。芋だってここまで踏みつけにされれば、怒らざるを得ないだろう。
物陰から男と女が姿を現す。二人は恐る恐る調教師をのぞき込むが、何とも腑に落ちない。

女 (呆れたように) ……死んだ。

男 (同じく) ……うん、死んだ。

女 ……何でかね？

男 何でって…、(思慮深げに) つまり、これは天罰だよ。同じ沖縄ん人のくせしてからに、大和ふーなーして、沖縄を馬鹿にするからだよ。だから、親御元祖の罰が当たったんだよ。人間生れ島のことを忘れてしまったら、もうおしまいだよ。

女 ……どうするね？

男 ううむ。(考え込む)

女 ウチは知らんよ。何の関係もないからね。

薄情なもので、女はさっさと自分一人小屋に戻り、何喰わぬ顔で座り込んでしまった。

男 ウチは関係ないって、おまえ……、僕だって何の関係もないんだからな。（とは言った

ものの落着かない）おまえな、まさか、僕を疑っているんじゃないだろうな。

女 ……。

男 言っておくけど、僕が殺したんじゃないよ。あれは、芋が殺したんだからな。

女 芋？……芋が、人を殺す訳？

男 だから、あの、芋が爆発して……、

女 芋が爆発する？

男 だから、おまえも見てたさ、何でえ。芋が爆発して……、

女 ……。

男 あれは芋だったんだよ本当に。僕がこんなして叩いた時は爆発しなかったさ。

女 当り前さ。芋が爆発するね？芋は人の命を助けるものなんだよ。

男 ……：…おまえな、まさか、僕が殺したと思っっているんじゃないだろうな？警察が来

て聞かれた時に「この人が殺しました」って言うんじゃないだろうな？

女 誰がそんなこと言うね？

男 女はウンターだからさ。

女 ウチは違うよ。ウチは言わないと言ったら絶対、雷が落ちても言わないよ。

男は飛び上がらんばかりに驚き、あわてふためく。

そして、調教師を抱え起こす。

男 (女に) おい、手伝え、誰か来た。隠すんだ、早く。

女 隠す？そんな大きなもの、どこに隠すね？(と、とり合わない)

男は調教師を引きずったまま、右往左往する。が、やがて良いことを思いついた。

彼は、調教師を自分の席に座らせると、どこからか帽子と鞭を拾って来る。

そして、おもむろに帽子をかぶり、ニンマリと笑う。

彼の手の鞭が鋭く鳴った。

男 (観客に) 皆さん、今晚は。本日はわが「人類館」へ、ようこそおいでくださいました。

すでに皆さん方、良くご承知の通り、人類普遍の原理に基づき、全て人間は法の下に平等であります。何人たりとも、その基本的人権は尊重されなければなりません。いつ、いかなる時、いかなる意味においても、差別は決して許してはならないのであります。つまり、……人類普遍の原理であります。そもそも、差別はどのようなにして生まれるのか、何が原因でなされるのか? (鞭を示し) これこれ、これであります。すなわちムチ蒙昧、ムチと偏見であります。ハッハッハ……。ムチかしい?

しからば、無知を一掃し偏見を正し差別を無くするにはどうすればよろしいか……。

という訳で、芝居は振出しに戻ってしまった。誠に不本意ながら、作者としては、如何ともしがたい。

御用とお急ぎでない方は、初めから繰返してみて頂きたい。いずれにせよ、そう、簡

単に幕は降りないだろう。

何故ならば「歴史は繰返す」ものなのだから………。